

## 「教育的関係」再考 Ⅱ — J. ラカンの理論を中心に —

鬢 櫛 久美子

### はじめに

本研究は、「教育的関係」を人間形成における<かかわり合い>のリアリティ<sup>(1)</sup>から捉え直そうとする筆者の一連の研究の中に位置づけられるものである。<sup>(2)</sup>つまり、<かかわり合い>の持つ両義性に視座をおき、人間形成を促す<かかわり合い>の議論の外に置かれてきた、過剰なくかかわり合い>、絶望的なくかかわり合い>にもまなざしを投げかけることによって、「教育的関係」を捉え直そうとするひとつの試みである。

「関係」、「関係性」という言葉を用いずに、<かかわり合い>という言葉を一貫して用いている理由は、E.H. エリクソンの発達理論にある involvement という概念をベースにし、日本語を訳し充てているからである。これまで、「教育的関係」については、エリクソンの理論や、E. フロムの<自由からの闘争>という概念を中心にも論じてきた。<sup>(3)</sup>

本稿においては、前者2人と同様、精神分析家 J. ラカンの理論を援用することで、これまでの議論を深めることを目的とする。ラカンの理論は難解とされ、教育の領域に引用されることが少なかった。そこで、まず、ラカンの理論が生成された背景を理解することから始める。そして、彼の理論の中心にある鍵概念を明らかにし、ラカンの理論から「教育的関係」論への示唆を導き出すこととする。

### 1. ラカン理論の生成の背景

#### (1) 哲学と精神医学の融合

ラカンは、フランスに生まれ哲学と医学を学び、精神分析をライフワークとした。精神分析とフェルディナン・ド・ソシュールに始まる現代言語学との出会いにより彫琢されたラカンの方法は、フロイトの実体論的思考を乗り越えることに成功した。「無意識はコトバのように構造化され

ている」<sup>(4)</sup>「人間の欲望は他者の欲望である」<sup>(5)</sup>というラカンのテーゼが何よりも良くそのことを物語っている。

ラカンの著作は、『エクリ』に代表されるようにそのほとんどが口頭での講演ないしゼミナールの内容を要約したものである。エクリとは「書かれたもの」という意味であることを考えるとこの題名は逆説的にさえ感じられる。しかし、このテキストは、「書かれたものと(エクリ)と話されたもの(パロール)の中間である」と、『無意識における文字の審級』の中でラカン自身が述べている。ラカンのテキストは、ラカンのいうところのエクリであろうとパロールであろうと、それはフロイトの残した精神分析の基本概念に対する透徹した読み込みの提示に他ならない。我々が、ラカンの教えの中から知識の断片を取り出そうとしても、その試みはむなしい徒労に終わることに気づかされる。確かに、ラカンの難解にして晦渋な言葉を前にして心酔し、深遠さを称賛することはできない。さっぱりわからないと言って絶望し投げ出すことを回避するためには、ラカンがフロイトを読み込んだように彼の言葉を繰り返し読むしかない。そうするうちに必ず、現われでてくるものがある。それは、ラカンそのものでもなく、読み手そのものでもない。ラカンの言葉に、読み手の経験を重ねあわせた、両者の間に現われた意味である。<かかわり合い>探究のためのラカンの解読を、このような作業として位置付けることが、シニフィアンをテーマとしたランゲージュから無意識を演繹するというラカンの方法論に違うことがないと考える。

ラカンの名前は、教育学の領域ではあまりなじみのないものである。最近になって、彼の伝記などが出版されている。<sup>(6)</sup>そこで、まずは、ラカンの理論の生成の背景を概観してみたい。

ジャック＝マリ＝エミール・ラカンは1901年4月13日、パリのカトリックの家庭に生まれ、1981年9月9日逝去した。高等師範学校で哲学を学び、後に医学を目指したラカンは、1927年にインターンとなり精神医学の訓練を受けた。1932年『人格との関係の中でのパラノイア精神病』と題する学位論文を提出した。第2次世界大戦終了時までのラカンについては、彼の行動に謎とされるところが多い。1936年に「鏡像段階 (stande du miroir)」に関する最初の発表がなされたが、鏡像段階論についての正式なテキストは、1949年の「<わたし>の機能を形成するものとしての鏡像段階」<sup>(7)</sup>まで待たなければならない。1953年のローマ講演として名高い「精神分析におけるパロールとラングージュの機能と領野」<sup>(8)</sup>の発表を経て文体的にも思想的にもラカンは、「ラカン」として我々の前に姿をあらわすようになったといわれている。1966年ラカンの諸論文が『エクリ』にまとめられた。先の博士論文と、『エクリ』以外には、ラカン自身が書いたものはほとんどない。21冊にも及ぶ『セミネール』は、ラカンの語ったことを他の人が書きとめたものである。1953年からサンタンヌ精神病院で始められたゼミナールは、1964年に高等師範学校に移った。彼の教えの場が精神病院から学校に変わったことと、『エクリ』の刊行とが影響してか、ラカンの読者と聴衆はおびただしい数にのぼるようになった。ゼミナールの部屋は、参加者でいっぱいであったと伝えられている。その中には、ロラン・バルト、ミッシェル・フーコー、ジャック・デリダ、ルイ・アルチュセール、ポール・リクールといった精神医学の領域以外の多彩な人々の名前を見出すことができる。このような人々を通して、ラカンの思想は現代思想、哲学の領域にも浸透していった。

本研究でラカン理論をくかかわり合い>探究のための分析の対象とする理由の一つは、ラカン理論が、ラカン本人が述べているように、精神医学や精神分析学のみならず哲学に、ことに近代思想の先端に位置する問いかけをもっと先へ押し進めるものとして、哲学に示唆するところが大きいからである。「私は考える、それゆえ私はある。」に対し、「私は、私の存在しないところで考える。それゆえ、私は、私の考えないところに存在す

る。」<sup>(9)</sup>とラカンは述べている。無意識の存在を主張しながらも、機械論の生理学にフロイトが執着したのに対し、ラカンは「主体」の構成における「鏡像段階の機能」についての研究により、コギトの哲学に真っ向から反論することになった。

## (2) ラカンとフランスの精神分析界

ラカンが、国際的精神分析の潮流の中で臨床的な面のみならず、思想的な立場においても特異な存在であると言われる理由は、ラカンが精神分析医として形成され活躍したフランスという場と、時間の中に見出すことができると考える。そこで、フランスの精神分析界の状況と、その中でのラカンの立場を概観してみよう。

フランスの精神分析は、フロイトと個人的な交友関係にあったマリー・ボナパルトによりドイツから移入された。1926年に「パリ分析協会」が設立され今日までつづいている。初期のフランスの精神分析界は、精神療法面よりも、フロイトの思想面に対する文学的、思想的興味が主流を占めていた。ナポレオンの曾孫であるマリー・ボナパルトが、自らの資産をつぎ込んでいたこと、また国際精神分析協会の副会長をしており知力、財力ともに力を持っていたこともあり、彼女の影響力は強かった。この時期にラカンは、分析家として教育を受けたのである。

第二次世界大戦になりユダヤ系の有力な会員がアメリカに脱出し、協会の活動はやむなく一次停止におこまれた。1946年活動が再開され、ラカンは1948年以降協会の教育委員会のメンバーとなり、若い精神分析家の養成にたずさわった。

マリー・ボナパルトの精神療法よりもフロイトの思想内容に対する文学的、思想的興味を重んじる傾向を批判する会員たちが、精神分析研究所をつくった。ラカンは研究所設立の重要人物とも対立し、1953年ローマ講演の直前に「フランス精神分析協会」を設立した。結果的にパリ分析協会は、2つに分裂したことになる。ここでも、ラカンは、組織の統率的な役割ではなく、教育的な機能を担当していた。ラカンは、ゼミナールを通して教育と、思想活動に従事したのである。

ハルトマンや、アンナ・フロイトが国際精神分析協会の主要なポストにあることから想像で

きるように、当時精神分析の世界の主流はアメリカの自我心理学であった。ところが、ラカンの理論は、マイケル・バリントンやクラインに言及したり、ウィニコットを引用し英国を中心とする対象関係論学派への関心は見せるものの、自我の構成的な機能を根底的に否定しアメリカの自我心理学を真っ向から批判するようなものであった。また、臨床技法においても分析時間など国際精神分析協会の取決めに従わないといった、ラディカルな姿勢をラカンは撮り続けた。

60年代から70年代にかけての Пари は、世界の「知の中心」の都となった。精神分析、哲学をはじめ先に挙げたような様々な学問領域の人々を通して、ラカンの思想は現代思想、哲学の領域にも浸透していった。

ラカンが、ラディカルなフロイト論者であると言われたり、ラカンの表現の仕方が曖昧であるとか、晦渋であるとか言われる理由は、ラカン理論が哲学的であることと、ラカンが精神分析家の教育に常にかかわっていたことに見出すことができると考える。ラカンは、若いころ哲学の教育を受けていること、フランスの初期の精神分析界が文学的、思想的興味に傾いていたこと、フランスが知の中心であったことがラカンの哲学的傾向を形成したと考えられる。ラカンの表現が難解なのは、教育を目的とし、聞き手を前に緊張した関係の中で、とことん思索し考えぬいた末の話し言葉であることによるところが大きいと推察される。

## 2. ラカンの鍵概念

ラカンの理論は、フロイトの無意識の発見がなした哲学への提言を先に推し進めることに寄与したといわれている。この点に注目し、<かかわり合い>探究にどのような示唆を与えるものかを見ていくこととしよう。あくまでも以下の論述は、精神分析の研究ではない。ラカンの概念にヒントを得て、<かかわり合い>のトポスを考察するという試みである。

最初に、ラカンの基本的な概念、「現実的なもの (le re'el)」に焦点をあて、ラカンの設定した3つの世界「現実界」、「想像界」、「象徴界」から、<かかわり合い>の世界を描きだしてみたい。

<かかわり合い>の世界がいかに不透明な世界であるか、言い替えれば把握しようとしても常に逃れ去り、すり抜けてしまうものを含んだ世界であるかが見えるだろう。2番目に、ラカンの「他者 (l'Autre)」という概念を検討する。手がかりは、鏡像段階論と、「図L」である。<かかわり合い>の世界に働く「他者 (l'Autre)」の作用を考えれば、語る主体と語りかけられる客体という二項からなる構造は解体し、間主観的な第三項としての言語、大文字の他者を介させた構造を構築しなおす必要に迫られる。教育の場面をはじめ、あらゆる場合に疑うことなく発してきた、「主体的に……」というパロールのはかなさを感じざるを得ないことになるだろう。

### (1) 「現実界」「象徴界」「想像界」

「現実界 (現実的なもの le re'el)」という概念は、ラカンのシニフィアンに基づく無意識の解釈の核心であり、最も基本的なタームである。確かにフロイトは無意識を発見した。しかし、フロイトの無意識は神経症の枠の中での無意識であり、抑圧されたものとしての無意識であった。さらに、フロイトは無意識に関して満足のいく概念を与えなかった。そこで、ラカンはシニフィアンによって、無意識の概念を規定し、「現実的なもの」の体験によって刻印されたものとして確立する。

動物行動学者ユクスキュルのUmweltという概念により説明されるように、それぞれの動物は、それぞれの種によって身分けられた世界を生きている。コトバを持った人間は、コトバ(ランゲージ)により分節された秩序ある世界、コト分けられた世界に生きている。<sup>(10)</sup><かかわり合い>の世界は、コミュニケーションの方法としてコトバを用い、それが生み出す「役割」と規範により成り立っている。このような、コトバにより分節された秩序ある世界を、ラカンは「象徴界 (le symbolique)」と呼んだ。

一方コトバ以前の世界を、ラカンは「想像界 (l'imaginaire)」と名付けた。発達論的には、コトバを獲得する以前の母子関係に代表される世界がこれにあたる。また、恋人同士の関係のような、自分と他人の区別のない世界、自分が他人であり、他人が自分であるような世界もこれに相当す

る。その世界は、母子、あるいは熱烈な恋人同士のような2人だけの「愛の世界」である反面、コトバによる掟が欠如した無秩序な危険な世界でもある。ラカンはとげ魚の性行動を例に、イメージの世界はエロスと攻撃的關係が隣接し合っていることを説明している。<sup>(11)</sup> 既にコトバを持ちコト分けられた世界に生きる人間と、人間以外の動物の個体維持と種の保存のため本能に組み込まれた行動が同じでないことを念頭におきながらも、愛の至福と攻撃や死の恐怖が潜むコトバなき世界は、身分けの世界にも相当するといえるのではないだろうか。

コトバでもイメージでも捉えられない世界を、ラカンは「現実界」と呼んだ。論理哲学者ヴィトゲンシュタインが「語りえぬものについては沈黙しなければならない」<sup>(12)</sup>と言った、語りえぬ世界、ことばにより分節することのできないカオスの世界のことである。古典、あるいは近代の哲学にとって、「存在するすべてのものは一つの世界の中に場を占めにやってくることができる」のであり、「意味は本質的に予料可能=先取り可能であり、真理は時間の作用を免れていて、つねに同じものであることを本質とする。事象は、『論理そのもの』であるような秩序の中に場を占めなければならない」<sup>(13)</sup>のである。現代に生きる我々も日常生活の中では、なかなかこのような知のあり方から抜け出すことができず、真実の世界は、経験的に、あるいは論理的に認識できるものと考え、できないのは自分の知識が足りない、あるいはものの見方が間違っているからだと思いがちである。しかし、先にも挙げたユクスキュルのUmweltという概念からすれば、存在するものがすべて一つの世界の中に場を占めにやってくるなどということはあるにやらない。動物の種ごとにそれぞれの世界があることは納得がいく。また、ハイデガーが「配慮的な気遣い (Besorgen)」からの「身の回りの世界」存在の認識は、その都度の必要性に応じたもの、つまり「道具的存在 (Zuhandensein)」としてなされているといったこと、また、「世界内存在」という実存的な世界の見方からすれば、「世界とは個々の人間によって現に生きられているその世界である」<sup>(14)</sup>。ハイデガーの考え方からすれば、一人一人の人間がその

人の世界を生きていることになり、存在するものはその人との関係、必要性に応じてその世界の中であられることになる。

我々は、種によって、あるいは個々によってそれぞれ生きられたる世界を生きている。それぞれに、コトバやイメージで捉えうる限りの世界を捉えて、真理を生みだそうとしているのであるが、つねに捉え切れない世界がある。それは、マイケル・ポランニの概念では、暗黙知=「われわれは語るができるより多くのことを知ることができる」といわれる様な世界である。コトバやイメージで、捉えることはできないが、我々になんらかの形で作用をおよぼしていることが感じられる世界、これをラカンは、「現実界」とよび、無意識の核心にあるものとして定立したのである。ここにラカンの無意識の把握の独自性がある。フロイトのいうように、無意識は抑圧されたものでも、治療の中で意識化されるものでもなく、ラカンは無意識の概念を「シニフィアンによって規定し、……現実的なものものの体験によって刻印されたものとして確立する」。

東洋思想と西洋思想の類似、あるいは融合といった問題は、大きなテーマであり<sup>(15)</sup>またそれぞれの文化や慣習に支えられた生きられたる世界であるから安易に比較すらできないが<sup>(16)</sup>、ラカンの「現実界」というテーゼの定立は、大乘仏教が客観的実在世界の言語的虚構成性を強調する立場と共通する。ラカンの理論を理解するためにここで比較検討してみたい。言語を、コミュニケーションの重要な手段であると同時に、あるいはそれ以前に、言語は意味論的には一つの世界分節システムである点において根本的に共通した枠組みを持っている。これは、「いかなる事物も、いかなる対象も、一瞬たりとも即時的(アン・ソワ)には与えられていない」が、しかし人間においては、「コトバの中に、自然に与えられている事物を見る幻想の根は深い」<sup>(17)</sup>とソシュールのことばにもあるように、「我々が、日常、無反省的に、『自然に与えられたままの』事物・事象と思ひこんでいる客観的对象は、実は、言語の分節意識の『根深い幻想』機能に由来する意味形象の実体化にすぎないということである」<sup>(18)</sup>。我々は、コトバの持つ特有の意味生産的、意味表象喚起的

機能により、コトバによって分節された世界を、生のままの自然の世界と思いついでいる。初期大乘仏教思想の代表者龍樹（ナーガルジュナ）は、「空」すなわち絶対無分節である存在世界を、「妄想分別（ヴィカルパ）」すなわち、本当はありもしない区別、差別をする、したがって、経験的世界は、「妄想分別」の所産であると論じた。このような考え方からすれば、我々が日常的な存在了解の地平で見ている世界からは、「分節以前」「現象以前」は見えない。言語でもイメージでも捉えられない「現実界」があることが理解される。

昨今教育の現場で問題となっている「いじめ」も、コトバを持つ人間のありもしない区別をする幻想の根深さに起因すると考えると、「いじめ」の意味を人間の＜かかわり合い＞の世界の中での出来事として、より深く捉えなおすことができるのではないだろうか。教育者と被教育者のあいだにおこる＜ズレ＞も、まなごしの世界に生きているだけならば生じることも無いのだが、人間の＜かかわり合い＞の世界がコトバの世界であるがために、言語化する度に常に逃れ去る「現実界」が、＜ズレ＞となるといってよいだろう。

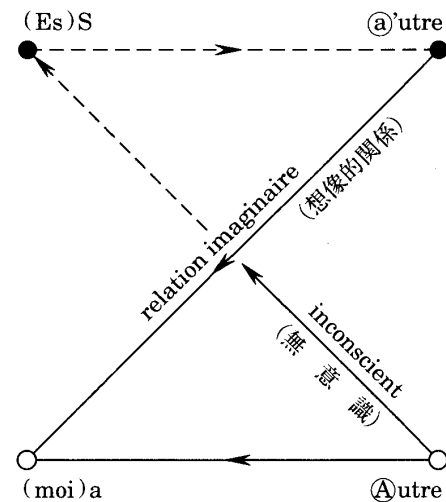
## (2) 「主体」と「他者」

### 1) 「主体」とトポロジー

「他者」はラカンの理論の中心におかれるべき鍵概念である。我々の日常世界では、広義には、他者とは自分（主体）以外の人間を指している。例えば、主体が語りかける対象、行為の対象、もしくは主体の周囲にいる人々などである。ヴィトゲンシュタインは、主体との間にコードができていない対象、言語ゲームが成立しない相手を他者とした。ラカンの理論において、「他者」という用語は発話（パロール）や行為の対象としての他者だけではない。むしろラカンの理論を特徴づけているのは、「主体」のトポロジーを構成する、象徴的關係の審級としての「大文字の他者」と、想像的審級としての「自我」と鏡像関係にある「小文字の他者」という2つの「他者」である。

ラカンは、「主体」のトポロジーを「図L」<sup>(19)</sup>と名付けられた図によって表している。図の記号から説明すると、Sは「主体」、フロイトのエスとかけてEsともいう。aは「自我(moi)」、a'は対象

の位置を取った「小文字の他者(a'utre)」、Aは「大文字の他者(Autre)」である。aとa'は、互いにイメージを鏡像的に送りあいつつ、一つのスクリーンを形成しており、その関係は想像的一視像的である。



図L (出典、Lacan『エクリ1』p.64)

しかしこの関係は、「現実界との出会い（テュケー）」による「絶対的他者 l'Autre」の出現によって少なくとも一瞬（線の持続としての時間とは別の時間性に属し、線の持続を切断する一瞬）、失効させられる。しかし、aとa'の想像的關係性は次の瞬間にはただちに復活し、「他者」はそのスクリーン（いわゆる隠蔽記憶）に映しだされてのみ、「主体」に到達する。「他者」から到来するもの（無意識）はこうしてa、a'間の想像的關係にさえぎられてのみ「主体」に現われるのである。

ラカンの理論における、「他者」の意味するところと「主体」と「他者」の関係を、「鏡像段階(stande du miroir)」を検討することで明らかにしてみたい。ラカンは鏡像段階の必要性和意義を以下のように述べている。

「鏡像は、人間においては機能的に欠くことのできないものです。何故ならそれは人間の生誕時の未熟さに由来する不完全性、構成的な失調、あるいは不一致に対して、整形外科的な補完を人間にもたらすからです。鏡像によるこの統合は決して完全なものになることはありません。といいますのは、それは正に疎外的な方法で、つまり自分のものではない像（イメージ）という形でなされるからです。そしてこの像（イメージ）が最

初の心的機能を構成するのです。この『私(モア)か他者か』という攻撃的な緊張は、人間の想像的な機能のすべてに必ず潜んでいます。』<sup>(20)</sup>

「鏡像段階」は、乳幼児が「私(je)」という体験に到達するまでの段階つまり、「想像界」の起源と、「想像界」から「象徴界」への移行という2つの形成過程が含まれている。そこで、L図を参照しながら検討してみよう。

まず、最初の想像的關係が出来上がるまでのプロセスを検討しよう。他の動物と異なり、未熟なままこの世に生まれた人間は、統一された全体としての自分の身体の経験を持っていないで、自分の身体を肢体の各部分がばらばらになっているものとして知覚する。運動系が未発達なために、先に発達した知覚系を駆使して、鏡像a'から統一した自分の身体像aを獲得するまでのプロセスを見ていこうというわけである。ラカンによれば、乳幼児はおおよそ生後6ヵ月位から18ヵ月位までの間に、「自分のものとして引き受ける像の動きと、鏡に映るその周囲との関係、つまりこの虚像の複合体と、その原物たる現実——自分の身体であれかたわらの人々であれ、さらには自分のそばにある諸々の対象であれ——との関係を遊戯的に体験する。』<sup>(21)</sup>と述べている。つまり、歩くどころか立ち上がることもまだよくできない乳児が、大人の腕の中や、歩行機の中から自分の身を載りだしたりして、いろいろな試行錯誤の結果、鏡を前にしてそこに写し出された自分の姿を自分の姿として認識し、自分の映像(image)を引き受けることができるようになる。このプロセスは、以下の3つの基本的段階に分解することができる。<sup>(22)</sup>

第1期 子どもは鏡像を実在するものとして知覚し、つかもうとしたり、近寄ろうとしたりする。

第2期 子どもは、「他者」は像にすぎず、実体ではないことを悟っていく。

第3期 鏡の中の「他者」を自分の像として知っている。

乳幼児の鏡の前での試行錯誤の行為は、理論的には上述の3期の存在と仮象の弁証法として説明することができる。このように「主体」の同一性(a)の獲得は、鏡像により自分の身体の統一

性として、「私(je)」という形で、先取される。「私」の構成は直接的な仕方で行われるのではなく、身体像の媒介を必要とする。<sup>(23)</sup> この「鏡像段階」を経て人は鏡像としての「他者a'」との「想像関係」に入るのである。図では、a-a'のラインが想像的關係を表している。

「鏡像段階」の体験により、乳幼児は自分をイメージと同一化することによって後におこるすべての同一化の基礎をつくる。子どもが自分を認識するようになるのは、自分ではないところのこの像を自分と同一視することによってである。<sup>(24)</sup> 鏡像段階のこの同一化は、「主体」のあらゆる同一化の原型となる、いわゆる「イマージ」の形成がなされるのである。そして、こうした同一化は、ヘーゲルを援用してラカンが説明している弁証法によって間主観化され、やがて言語を媒介とした上、「主体」と「自我」の成立につながっていくのである。

「自我」の成立の途中段階における、おもしろい現象を我々は経験的に知っている。それは、ラカンがシャルロッテ・ビューラーの「転嫁現象(transitivisme)」を引用し、他者の像による真の捕らわれ(captation)といている現象である。幼児が、自分自身を意識し始める最初の段階で、自分が相手を殴ったのにもかかわらず、相手が自分を殴ったと言って泣きだしたりする現象を指しているのであるが、これは、鏡像である「他者a'」に同一視し感情も捕らえ込まれてしまうものを指している。

## 2) 「想像界」から「象徴界」へ

乳幼児が、言語を獲得するプロセス、「想像界」から「象徴界」への移行のプロセスを見ていくことにしよう。乳幼児は、鏡に写しだされた自らの像の次には、母のイメージを鏡像、「他者a'」とし、それに限りない親しみを抱くと同時に、激しい葛藤を抱くようになる。想像的關係は、aとa'がお互い相手を支配しようと激しい戦いを繰り広げる関係、ヘーゲルのいわゆる「主と奴の弁証法」の関係であり、また、フロイトの理論にある母と子の近親相姦から死に至る泥沼の如き癒合関係に他ならないのである。

このようなプロセスを、ラカンは次のように述べている。

「鏡像段階こそが、この攻撃的な関係の本性と、それが意味するものとを明らかにしてくれます。攻撃的な関係が自我と言われる形成物に介入してくるのは、攻撃的な関係が自我を構成しているからであり、またこの自我はそれ自体ですでに他者であり、主体にとっては内的な二重性という形で設立されるからです。つまり自我とは、主体が他者の中に見出す主人であり、自我は他者自身の中心にある主人性の機能という形で設立されます。他者とすべての関係には、それが性愛的なものの場合ですら、『彼か私か』という排斥関係の残響が常に存在しています。その理由は、想像的な次元では、他者が主人の位置をいつも奪回し得るように人間の主体は構成されており、また、主体の中には常に一部知りえぬ自我、つまり主体の諸傾向、行動、本能、欲動の全体を支配する、主体へと植えこまれた主人があるからです。」<sup>(25)</sup>

日常経験の世界で考えてみよう。乳幼児は次第にコトバを覚え始め、同時にかかわりの世界に父親が入ってくる。すると、これまで述べてきたような「想像関係」に終止符を打つべく、「大文字の他者A」が出現することになる。「大文字の他者A」とコトバは、「主体」の社会秩序編入を可能にする。<sup>(26)</sup>「大文字の他者A」は、「小文字の他者a」のような鏡像=自己の似姿としての「偽りの他者」などではなく、一つの絶対的な他者、いわば「真の他者」である。ラカンの理論においては、この他者は「真の他者」であると同時に父性を表し、この「A」の出現がa-a'のラインの葛藤と癒合を禁ずるといふ、いわゆるエディプス・コンプレックスの図式がここに導入される。「真の他者」の出現とそれに対するコミュニケーションの必要性に応じる形で、「主体S」が表れてくる。発達段階において、言語というコミュニケーション手段の獲得の時期に、「主体」は「真の他者」とその関係性の中において成立するのである。S-Aのラインの本質とはコトバによる関係、象徴的關係にはほかならない。ラカンは「主体」とは統一的な「私」という実体などではなく、重要人物(父母)の影響を受けて継時的に発展してきたものであり、いわばフィクショナルなもの、根源的に分裂したものであると考えた。つまり、虚構的存在であると述べているのである。<sup>(27)</sup>

### 3) 「鏡像段階」

これまで、ラカンの「鏡像段階」について発達の時系列に沿って述べてきたが、ここで、ラカンの「鏡像段階」の核心をまとめてみたい。大まかに以下の4点となる。

- ① 乳幼児は「私」「自我」を鏡像によって受け入れるが、それはこの「自我」(moi)が想像的-視像的(imaginarie)であること。
- ② 「主体」は「私」をまず「他者」として認識すること、言い替えれば「自我」はその成立からして、伝統的な意味における「自我」としてよりは、むしろ「他者」として成立するのであり、この時既に「自我」さらには「主体」は、「他者」としての自己を投企的な形で実存として成立する。
- ③ 「主体S」は、コトバという一つの関係性の中で、「大文字の他者A」とともに生成するのであり、実体としての「主体」ではない。
- ④ 「主体S」が語るコトバもまた、「主体」のものではない。

このような「鏡像段階」の意味するところは、デカルト主義、アメリカを中心に発展し当時の精神分析学界の主流をなしていた自我心理学、イギリスで展開された対象関係論、これら3つの視座への批判として、ラカンが論じていることから明らかにすることができる。ラカンは鏡像段階の概念は、「無意識とは他者の言表(ディスクール)である。」という主張と共に「コギトに直接由来するあらゆる哲学に対立」<sup>(28)</sup>するものであると述べている。その理由は、1つには、デカルト以来の哲学の伝統は、「主体」、「自我」、ないし「意識」を第一原因と見做すが、ラカンの理論においては、自我とは外界との鏡像的反映に過ぎず、実体としては定義できぬものであるからである。2点目には、「主体」の構成は、単なる統覚作用の結果ではなく、媒介として身体像を必要とするということから、デカルト主義の伝統が斥けられている。

また鏡像段階の主張は、精神分析の流れの中においては、多くの精神分析学者により信奉されている「自我心理学」にも対抗するものである。それは、自我心理学が、「自我こそが諸現象に普遍的な枠組みであり、すべては自我を通過するのであって、自我の退行だけが無意識へと近づく唯一の道」<sup>(29)</sup>だと考え、自我を非葛藤的な領野とし、

実体化してしまったからである。ラカンの理論では、「自我」は、鏡像としての「他者a'」との同一化により生みだされる。したがって、「自我は、統合からもれた相続不能の部分、即ち必要不可欠でありながら耐え難い謎の部分と分かち難く結びついているのです。……それは自分は自律的個人であると感じている限りでどんな人間の中にもある異質なディスクールです。」<sup>(30)</sup>

ラカンは、対象関係論については次のように述べている。「分析において対象関係が重要視されるようになった結果、もっぱら想像的關係の世界が最も優位性を占めることになり、本来の意味の分析の領野がないがしろにされてしまったのは、実に驚くべきことです。……すなわち自我の退行から生まれる特徴に力点を置いています。そのために、無意識への接近の道を想像的な平面にだけ据えることになってしまいました。」<sup>(31)</sup> 対象関係論において、象徴的關係の面が、軽視されてしまったことをこのように批判している。「無意識はコトバのように構造化されている。」というラカンのテーゼが示すように、他の人間以外の動物と異なり、ランゲージを持った人間の<かかわりあい>は、想像的關係すらも象徴的に練り上げられていることを、次のように主張している。

「想像界が確かにすべての動物にとって、生命の導きであるということです。しかしたとえ、イメージというものが我々人間の領野において同じように重要な役割を果たしているとしても、この役割は象徴的な次元によって、全く捉えなおされ、練り直され、再度生気を吹き込まれているのです。人間においては組織化された構造という特徴によって規定されている象徴界というあの次元へと、常に様々な程度に統合されているのです。」<sup>(32)</sup> コトバを持ってしまった人間にとっては「想像的關係」はそれ自体で表れることはなく、必ず「象徴關係」に裏打ちされたものであることを論じている。ラカンの「鏡像段階」が、「想像界」から「象徴界」への移行プロセスを含んでいることは、人間の無意識の構造を考える上で重要な点なのである。

「鏡像段階」は単に幼児の心理的発達の一段階としてのみ考慮されるべきではなく、むしろ共示的に考えられるべきである。その意味で、ラカン

自身も「鏡像段階」はむしろ「鏡像的位相 (phase du miroir) と言った方がよいでしょう」といつている。<sup>(33)</sup> 「想像的關係」と「象徴的關係」は、人間の世界に固有な構造であり、「鏡像段階」はこの構造が人間の発達の最初の段階から現われることを示しているのである。

## おわりに

ラカンの「現実界」、「主体と他者」、について詳論してきた。これまでの各説での議論を要約し、ラカン理論が<かかわり合い>についての探究に示唆するところをまとめてみよう。

### (1) 「現実界」と教育のロゴス中心主義批判

人間の世界はいかなるものかという問いに対してラカンは、「想像界」、「象徴界」、「現実界」という3つの世界からなると説明している。「想像界」という自他未分化なまなごしの関係にあって、まなごしはあまねくすべての物を認識するよう思われるが、動物の環界を考えあわせれば理解されるように、その動物の種にとって意味を持つ世界を選択的に分節化して住んでいる。そして、「想像界」を何よりも特徴づけているのは、まなごしによっては自らのまなごしは認知することができないと言うことである。象徴的關係に入って初めて、すなわちコトバの世界に入ることで、人は自意識をもつことができる。人は生体として、言語の中に生まれる。生まれてすぐのわずかな期間以降は、「象徴界」に住まい、コトバにより分節された世界に生きる。象徴的關係とは、コトバによって自分とそれを取り巻く世界に意味付けを与えていくことであるが、同時に必然的にその意味付けから抜け落ちた部分が残っていく。この言葉で把握できない次元を、「現実界」とラカンは呼んだのである。ラカンの言葉、シニフィアンを用いて説明すると、我々の見ている「現実界」は、断続化され、細分化され、指標化されたものである。つまり、シニフィアンとして組織化されているのである。ラカンは、セミナーXIのなかで、「自然は、明確にいうなら、シニフィアンを提供する。そしてこれらのシニフィアンこそが、初源的なしかたで、人間のあいだの關係性を組織化し、構造を与える。」<sup>(34)</sup> このようにいつている。コトバを



もった人間は、世界の一部をシニフィアンとして組織化して認識していることを先に理解した。つまり、混沌とした世界をシニフィアンにより構造化しているのであり、人の<かかわり合い>もシニフィアンこそが組織化し、構造をあたえ、形を付与するのである。

ラカンの「現実界」という概念は、人の<かかわり合い>の世界には、知覚的にも言語的にも把握できない世界があること、いや、現実の世界のほんの一部分を視覚的に、言語的に秩序化しているにすぎず、それを取り巻くようにはかりしれず広がっている無秩序な世界があることを、<かかわり合い>の世界を考える上で考慮すべきことを示唆している。牽いては、現代の教育が言語的な知を偏重した営みであることに反省を促すものである。こうして理論を言語化した途端に、ここから抜け落ちていく部分があること、言語化のバニングポイントを常に謙虚に受け止め、教育批判をしなければならないことを身にしみて考えさせられる。

## (2) 「主体」と教育の伝統的ヒューマニズム批判

ラカンの「鏡像段階」と「主体」のトポロジーを表したL図を関連させて通覧した。要約すれば以下のようになる。

原初的には、人は身体的にまとまりを持った「私」を、自己の鏡像から獲得する。この鏡像の原理に従って「自我」は、「他者」を鏡像としてそれに同一化することで形成される。「自我a」とは外界の種々の物に自らのアナロジーを見出し、それに同一化し、その都度成立するものであり、実体として定義することはできない。鏡像としての「他者」を、ラカンは「小文字の他者a」とよび、「自我」と「小文字の他者a」との間には「想像界」が成立する。「大文字の他者A」により、「主体」は法と秩序のある「象徴界」に編入される。「象徴界」はシニフィアンの綱目により編成されたコトバの世界であり、無意識を含み持つ「主体S」に意味がもたらされる。フロイトが、エス、エゴ、スーパーエゴで表した「主体」の構造を、ラカンはエス、「小文字の他者a」、「大文字の他者A」、エゴの四角形で表した。そしてフロイトの構造が、「主体」の内部で完結する構造であるのに対し、ラカ

ンの「主体」の構造は、具体的な外部の他者がそれぞれの「他者」の場を占めることにより、「主体」が経時的に発展生成していくトポロジーとして描かれている。

ラカンの「主体」のトポロジー論から考察すれば、具体的な他者との<かかわり合い>が「主体」の生成の場を構成する。つまり、「小文字の他者a」を鏡像とした想像的關係と、社会的秩序と規範をもたらす「大文字の他者A」との象徴的關係という2つの位相を構成するのである。したがって、「主体」は、具体的な他者と間主観性を構築しなければ生成されえないことになる。このような認識は、「主体」は「あいだ」に成立するものだという木村敏の認識や<sup>(36)</sup>、廣松渉の「表情」論と通低するものである。<sup>(35)</sup> 主体生成の<かかわり合い>の場においては、「自己」あるいは、「自我」が先にあつて、それから他者認識が成立するのではなく、発達の的に考えても、「他者」は「自己」成立時点より既に<かかわり合い>の基底に存在する。既に人間社会や文化に組み込まれた身近な大人たちが示す表情を始め、身振り言語、音声言語などをまなざしやコトバによる<かかわり合い>により取り込み、主体が生成発展していくのである。

ラカンの「主体」というものが、完結したシステムとしてではなく、身の周りの他者との<かかわり合い>により経時的に生成発展するものであると考えたとき、教育の現場で常識的に用いている「主体的な」という言葉の持つパラドックスに陥る。「主体的な人間形成」という言葉の使用を改めて吟味しなすことを迫られる。「主体」が出現するためには、他者との相互主観性が必要であり、「主体的な」という言葉を用いている教育者が、鏡像としての「他者」として、あるいは規範を与える「他者」として、「主体」の生成に関与していることを認識し、反省しなければならない。また、「教育的関係」論の歴史に見られる「教育主体は、教育者か、被教育者か」という問いも意味をなさないものとして消滅せざるをえない。

## 註

1. E.H. エリクソンの、アクチュアリティ (actuality)、リアリティ (reality)、ファクチュ

- アリティ (factuality) ということばの使い分けに基づいて、<かかわり合い>のリアリティを探究し、アクチュアルなくかかわり合い>のありかたを模索したいと考えている。3つのことばの使い分けについては、エリクソンの *Toys and Reasons* に依拠した。
2. 鬢櫛久美子, 『<かかわり合い>の人間学 — 「教育的関係論」の地平 —』 (博士論文) が一連の研究をまとめた物である。
  3. 以下の2つの論文である。  
 鬢櫛久美子, 「エリクソンの < vital involvement > と異世代間の相互形成」, 『名古屋柳城短期大学紀要』第19号, 1997年, pp.101-116.  
 鬢櫛久美子, 「『教育的関係』再考 — E. フロム <自由からの逃走> という概念を中心に —」, 『名古屋柳城短期大学紀要』第20号, 1998年, pp.151-162.
  4. J. Lacan, *Ecrits*, Editions du Seuil, 1966, p.594.  
 J. Lacan, *Les Psychoses: Le Seminaire de Jaques Lacan, Livre 3*, Texte etabli par Jaques-Alain Miller, Editions du Seuil, 1981. (『精神病 上下』, 小出浩之・鈴木國文・川津芳照・笠原嘉訳, 岩波書店, p.186.)
  5. Lacan, *Ecrits*, p.814.
  6. Elisabeth Roudinesco *Jacques Lacan — Esquisse d'une vie, historire d'un système de pensée —*, Librairie Arthène Fayard, 1993. 『ジャック・ラカン伝』, 藤野邦夫訳, 河出書房新社, 2001年.
  7. Lacan, *Ecrits*, pp.93-100.
  8. *ibid.*, pp.237-322.
  9. *ibid.*, p.517.
  10. 丸山圭三郎, 『欲動』, 弘文堂, 1989年.
  11. ラカン, 『精神病 上』, p.115.
  12. L. Wittgenstein, *Tractatus Logico-Philosophicus*, Routledge & Kegan Ltd., 1961. (『論理哲学論考』, 『ヴィトゲンシュタイン全集 1』, 奥雅博訳, 大修館書店, 1975年, p.120.)
  13. A. Juranville, *Lacan et la Philosophie*, Presses Universitaires de France, 1984. (『ラカンと哲学』, 高橋哲哉・内海健・関直彦・三上真司訳, 産業図書, 1991年, p.1.)
  14. M. Heidegger, *Sein und Zeit*, 1927. Gesamtausgabe band 2, Vittorio Klostermann, 1977. (『存在と時間』, 細谷貞雄訳, 筑摩書房, 1994年.)
  15. 井筒俊彦, 『井筒俊彦著作集 9』.
  16. 鈴木瑞実, 『悲劇の解説 — ラカンの死を越えて —』, 岩波書店, 1994年.
  17. 井筒俊彦 (『井筒俊彦著作集 9』 p.52.) はソシユール手稿 9 (丸山圭三郎 訳) よりこれを引用している。
  18. 井筒俊彦, 『井筒俊彦著作集 9』, p.52.
  19. Lacan, *Ecrits*, p.53.
  20. ラカン, 『精神病 上』, 岩波書店, p.157.
  21. Lacan, *Ecrits*, p.93.
  22. Jean-Michel Palmier, *Lacan*, Editions Universitaires, 1970. (『ラカン — 象徴的なものと想像的なもの —』, 岸田秀訳, 青土社, p.30. を参照した.)
  23. 同上書, p.53.
  24. 同上書, p.47.
  25. ラカン, 『精神病 上』, p.154.
  26. 鈴木瑞実, 『悲劇の解説 — ラカンの死を越えて —』, 岩波書店, 1994年, p.160.
  27. 同上書, p.161.
  28. Lacan, *Ecrits*, p.93.
  29. ラカン, 『精神病 下』, p.13.
  30. ラカン, 『精神病 上』, p.223.
  31. ラカン, 『精神病 下』, p.12.
  32. ラカン, 『精神病 上』, p.12.
  33. Lacan, *Ecrits*, p.184.
  34. 若森栄樹, 『精神分析の空間 — ラカンの分析理論 —』, 弘文堂, p.188. の訳にしたがった。
  35. 木村敏, 『人と人の間』, 弘文堂, 1972年.  
 『あいだ』, 弘文堂, 1987年.
  36. 廣松渉, 『表情』, 弘文堂, 1991年.

## Reconsideration of “Pädagogischer Bezug” II — With Focus on J. Lacan’s Theory —

Kumiko BINGUSHI\*

This article is one of the researches that I have reconsidered “Pädagogischer Bezug” with focus on the concept of “involvement”. This article discusses J. Lacan’s theory in following three points.

1. The back ground of his theory and history of psychoanalysis in France.
2. His concept “le re’el”.
3. His concepts “S(Es)”, “stande du miroir” and figure “L”

In Pedagogy his theory was not quoted because it is very difficult and philosophical. In 1926, Freud’s psychoanalysis was introduced into France. In those days French psychoanalysts were interested in Freud’s theory but not in Freud’s clinic. And, Lacan studied philosophy and medical science at university. So how he think is philosophical and literary.

He classified the world and named “le re’el”, “le symbolique”, “l’imaginaire”. The world “le re’el” we cannot recognize with language. He insisted “S(Es)” is not generated without others those are named “l’Autre” and “a’utre”.

Based on these points of view, we should reconsider we are educated by language and knowledge.

This article proposes that we should investigate carefully the concepts “subject”, “independently” and, “individuality”.

キーワード：教育的関係 (*Pädagogischer Bezug*)、<かかわり合い> (*involvement*)、ラカン (*J. Lacan*)、現実的なもの (*le re’el*)、主体 (*S, Es*)